

訪問教育における自立活動『みんなの会』の実践と役割

— ボバース記念病院での実践報告 —

本校訪問教育部

1 はじめに

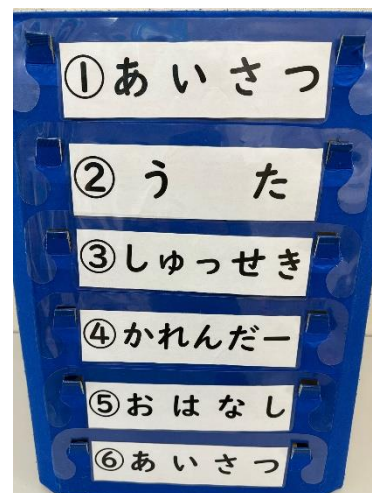
訪問教育部では6つの病院（国立病院機構大阪刀根山医療センター、社会医療法人大道会ボバース記念病院、国立循環器病研究センター、愛仁会リハビリテーション病院、大阪医科薬科大学病院、医学研究所北野病院）に入院する児童生徒と在宅療養を要する児童生徒を対象として、訪問教育を行っている。中でも、医療法人大道会ボバース記念病院（以下、ボバース記念病院）は、訪問教育部に在籍する児童生徒数が最も多い。訪問教育は、週に3日、回あたり2時間の学習時間が基本となっている。体調や個々に違うリハビリスケジュール等でその日の参加が難しくなったり、学習時間が短くなったりすることがある。また、長期入院の児童生徒が少なく、1ヶ月前後から長くて2、3ヶ月ほどの比較的短い入院期間の児童生徒が多い。学習内容は、自立活動の学習を主に必要とする児童生徒が多い。課題に応じて集団で授業を行うこともあるが、入院期間や体調の影響で、同じメンバーで活動を積み重ねていくことが難しい。そうした状況を抱えながらも、訪問教育部では『みんなの会』を大切な学習活動と位置づけて継続している。本稿では、ボバース記念病院で取り組んでいる集団での自立活動『みんなの会』について報告する。

2 自立活動『みんなの会』の取り組み

（1）概要

『みんなの会』は、「はじまりの会」と「集団活動」の二つの内容を、複数人での授業がある日は、基本的に毎日15分から30分程度で行っている。その日の授業時間、参加予定の児童生徒の学習課題によって両方取り組むこともあれば、「はじまりの会」のみになる日もある。どのような活動内容にするのかについては、その日の担当教員同士で打ち合わせをして決めている。

『みんなの会』は、病棟の一室を貸していただいて展開しているが、入院している子どもたちのデイルームでもあり、ベンチやテーブル等も入っているため、その日の空いているスペースを使用しての活動になる。扉を閉めて音が漏れ出ないようにすることも難しいため、省スペースで展開でき、大きい音が出すぎないような活動を選んで行っている。



（写真1）はじまりの会のプログラム

①はじまりの会

司会は、「やりたい」と立候補する児童生徒もいれば、司会をすることに消極的な児童生徒もいる。いつもやりたがる児童生徒が複数いたり、譲り合ったりするような児童生徒が複数いる場合には、くじ引きをして決めるようにしている。また、いつも消極的な児童生徒にやってみようかという様子が見られれば立候補を受け入れるなど、その時々メンバーの様子を見て司会を決めている。進行が難しい場合は、児童生徒の実態に合わせて教員が言葉を補ったり、プログラム提示のカードを外す動きを支援したりする。

【みんなの会のプログラムと学習内容】（写真 1）

① あいさつ	司会の呼びかけや合図に合わせてみんなで「よろしくお願いします」とあいさつをする。
② うた	『みんなの会』のテーマソングに合わせて、歌を歌う。歌が難しい児童生徒は、楽器を鳴らして参加する。
③ しゅっせき	司会が名前を尋ね、促された児童生徒が名前を伝え、みんなに呼名してもらい返事をする。
④ かれんだー	数字・天気カードを選んだり、日めくりを使ったりして、今日の日にちと天気を確認する。カードはフェルトで作ったもの、紙のものなど、児童生徒に応じて使い分けている。
⑤ おはなし	個別で取り組んでいる学習活動や近況を伝えたり、好きなことをクイズ形式にして出題したりする。
⑥ あいさつ	司会の呼びかけや合図に合わせて、みんなで「ありがとうございました」とあいさつをする。

②集団活動

集団活動では、大型絵本の読み聞かせ、ふれあい遊び、ボウリングやボッチャといったボールゲームを行うことが多い。大型絵本は参加人数が多くなってもみんなが見やすく、弱視の児童生徒にも捉えやすい教材である。絵本「おおきなかぶ」の読み聞かせをした後に、鈴のついたロープを使い、「おおきなかぶ」のごっこ遊びをしたり、「はらぺこあおむし」の歌つきの読み聞かせを行ったりしている。もう少しストーリーを楽しめる児童生徒が参加している時は、「おばけのてんぷら」「そらまめくんのベッド」などのストーリー性のあるものを選んでいく。ふれあい遊びは、繰り返しがあり、くすぐりやタッチ、手と手を合わせるなどの簡単で思わず笑顔になれる動きがある曲を選んでいく。ボウリングやボッチャといったボールを使ったゲームもよく行われおり、自発的な動きが出にくい児童生徒も参加しやすいため、よく取り組まれている。（ひとり 2 回ずつで誰が一番得点を得られたかといった競い方でゲームを進めることが多い）上肢がスムーズに動かない児童生徒でも、スロープや発射台を利用することで、少しの力やわずかな動きでもボールを転がすことができ、自分の動きを活かして能動的に参加できるゲームとなっている。

（2）児童生徒の様子

①「はじまりの会」

司会に当たり、友だちや教員の注目が集まることにやる気を出したり、緊張を感じていたりとは反応はそれぞれであるが、みんなそれぞれに周囲の友だちを意識している様子がある。それでも、自分の呼びかけに応じてみんなが応えてくれる様子に嬉しそうな表情を浮かべる児童生徒が多い。

みんなの会の「うた」では、前奏が聴こえると待っていたように笑顔になる児童生徒が多い。大きな声でみんなをリードするように歌ってくれる児童生徒がいて、あまり大きな声を出そうとしない児童生徒も引っ張られるように大きな声で歌えたということも多々あった。呼応があるパートが来た時に教員に手マイクで「おはよう」と促されると、他のパートは聴くに留まっていた児童生徒が小さな声ながらも応じることもあった。

「しゅっせき」は、お互いの名前と顔を知る良い機会にもなっており、2 回目に会う時は前回知らなかった友だちの名前を覚えて、「〇〇さん！」と友だちに先がけて名前を言う場面も見られる。また、みんなに名前を呼んでもらうことで、自分が呼ばれたことを意識

I 実践報告

し、手や腕をあげたり、口を動かしたり声を出したりなど返事を返そうとする姿を見ることができる。

「おはなし」は、自分で話題を考えて発表したり、友だちに質問したりできる児童生徒が特にいきいきとした表情を見せてくれる場面である。中には、何を話題にしたらいいか悩んだり、話を順序だてて発表したりすることが難しい児童生徒もいるが、他の友だちの発表を聞く中で、何かを発表してみたい気持ちを挙手や表情で表現しようとするところがあった。教員と「これとこれだったら、どっち？」などのやり取りを重ねる中で、それぞれのコミュニケーション方法で Yes・No などの決定を繰り返しながら、友だちからの話題にこたえるだけでなく、自分が伝える番になって参加できるようになっていく姿を見ることがあった。

②「集団学習」

繰り返しの多い絵本では、繰り返しのフレーズを手がかりに予想し、「次はこれかな?」「確かこの後はこれだったよね?」と待ち望む表情を見ることができる。弱視など視覚的な難しさを抱えていても、教員の読み聞かせの抑揚に耳を傾けている様子が窺える。

その後に続く、絵本を題材にした「ごっこ遊び」は、みんなが好きな活動であり、その前に聞いたストーリーに入り込んで楽しむ様子が見られる。「おおきなかぶ」の「うんとこしょ!どっこいしょ!」などリズムのある言葉に後押しされながらロープを引っ張り、かぶが抜けた時の「どっかーん!」の声と抜けた手ごたえに全員が笑顔になる。みんなとの一体感を感じられ、何度やっても楽しめる活動となっている。

ボウリングは、ボールを押してスロープを転がりピンが倒れる様子を追視したり、その音を聞いたりすることで、その結果を感じることができる。繰り返し取り組みの中で、ボールを変えて倒れやすいものを試してみたり、投げたり転がしたりする時の力加減や角度などを考え、一本でも多く倒そうと工夫する姿が見られる。

ボッチャは、ボウリングと違ってピンがないため、ボールが落ちた位置が捉えられないと結果が分かりにくい。得点を計算したり、競ったりすることを楽しめる児童生徒にとっては、数を学習しながら盛り上げられるゲームとなっている。ボッチャも繰り返しの中で、より多くの得点が得られるように投げ方、狙うところを考えている様子が見え、「もっと点を取りたい」と意欲的に活動している。

視覚的にその様子が捉えられない児童生徒も、友だちや教員の「倒れたね!」「やったー!」といった歓声を聞いて、自分が投げたり転がしたりしたボールがどれだけピンを倒したり、得点をとったりしたのかを感じ取ることができる。歓声があがると、表情が緩んで笑顔になり、次に自分の番が来た時に前回より腕に力が



(写真 2) 集団活動ボウリング



(写真 3) ボウリングのボールを自分で選択します

I 実践報告

こもり、得点を取った時の喜びの表情がより大きくなることは、期待感の表れと捉えることができる。

3 まとめ

自立活動の目標に根ざした活動としての『みんなの会』は、下記の3点である。

比較的近い年齢の子どもたち同士が直接関わり合える場として期待でき、下記の3点をねらいとする場になっている。

『みんなの会』のねらい

① 関わってくれる人の存在を感じる

参加している児童生徒や教員の話している様子や、その活発な雰囲気を感じて楽しさを感じてほしい。周囲の人からの働きかけを受け止め、関わる人の存在に気づき、楽しい経験を重ねる中から人との関わりを広げていこうとする気持ちを育てたい。

② 自分の思いを伝える・表現する

普段は関わりが少ない児童生徒や学習場でふれあうことのない教員との関わりによって得られる刺激がある。質問されたことに言葉で答えたり、促しに対してVOCAや挙手などの手の動きや表情の変化で応じたりとするなど、自分の思いを自分にできる手立てで伝え、表現してほしい。

③ 自己決定する

「〇〇にする？」「どっちがいい？」などの言葉かけに迷ったり、はっきりとした表現での返答が難しかったりすることはあるが、返事を待つ時間があり、みんなが自分の返事を待ってくれているという時間を感じることで、自分が決めたことが尊重されることを知ってほしい。また、それを受け入れられることで自分の思いを出せる安心感につながってほしい。

最初は、受け身がちに参加していた児童生徒も回を重ねるごとに、「見る」から「やってみたい」に変化していくことが多い。その変化が緩やかであっても、続けることで集団の力で引き上げられていく姿を見ることができる。病院という様々な制約のある場ではあるが、児童生徒の多様な学びを保障するために自立活動『みんなの会』を継続して取り組んで行きたい。



(写真4) ボッチャ